

むすび

「ひと」を「たから」とし、新たな豊かさをともに創造する（協創）きょうぞう

緑萌ゆる六甲山、陽光に輝く美しい海や郊外の田園風景など、世界でも類を見ない恵まれた風光の中で、神戸はその国際性豊かな歴史を刻んできました。とりわけ1868年の兵庫開港以後、世界との交流をますます広げながら、先人たちの英知とたゆまぬ努力のもとに産業を興し、着実に都市としての成長を遂げてきました。

また同時に、多様な外来文化を取り入れながら、市民の寛容性ある気風や魅力的で快適な暮らしの文化を培い、今日に至っています。

しかし一方で、未曾有の被害をもたらした阪神・淡路大震災による暮らし・経済などへの深刻な影響に加え、急激な少子・超高齢化やグローバル化の進行、さらには地球温暖化など、わたしたちは、先人たちも経験しなかったような急激な社会経済情勢の変容にさらされており、その的確な対応を迫られています。

このため、前例にとらわれない新たな都市づくりの仕組みを構築するとともに、創造とイノベーションを引き起こし、2025年（平成37年）に向けた神戸づくりを進める必要があります。

神戸づくりの長期的な方向性を示すこの指針では、

- 第1部で、創造都市（デザイン都市）の実現と市民・地域・広域の3つの視点
- 第2部で、市民の暮らしをまもり、経済を発展させる取り組み
- 第3部で、ひとを育み新たな豊かさを創造する取り組み
- 第4部で、安全を高め未来につなぐまちづくり
- 第5部で、神戸を支えるまちの形成とめざす姿
- 第6部で、「神戸づくり」にともに取り組む仕組みづくり
- そして第7部では、「世界の中での神戸」の確立

などの観点で、めざす将来像や民・学・産と行政とともに取り組むべき内容について述べました。

今後、これらの取り組みを通じて、わたしたちは、この恵まれた風光や国際性豊かな神戸の個性にさらに磨きをかけながら、国内外から人材が集い、交流し、それらのもとに企業等の集積が進み、ひいては持続的にまちの経済活力や成長力を高めていかなければなりません。また同時に、神戸に住み、集う人々にとって、きずなやこころの豊かさを感じられる安全・安心で満足度の高い高質なまちへとさらに飛躍・発展させていくことが望まれます。

「ひと」を「たから」とし、新たな豊かさをともに創造する（協創）

少子・超高齢化やグローバル化が進み、ますます予測困難な時代を迎える中において、神戸が多くの人材に選ばれ、新たな価値を創造しながら都市としての存在感を国内外で増していくためには、次代に対応した都市戦略を進めることが重要です。

そのため、これからの神戸づくりでは、都市ぐるみで「ひと（人）」を「たから（財）」と捉え、多様な「人財」が集い・交わり・生きるまちづくりを進めるとともに、それら「人財」のきずなを深めながら協働と参画をさらに発展的に推進し、新たな豊かさを創造していく姿をめざします。

神戸づくりの指針では、この姿を「協創」と呼ぶこととします。

神戸医療産業都市構想

神戸医療産業都市構想は、ポートアイランド第2期において先端医療技術の研究開発拠点の整備や民・学・産と行政との連携により、医療関連産業の集積を図ることで、「市民福祉の向上」、「神戸経済の活性化」、「国際社会への貢献」をめざしており、立ち上げから12年が経過した現在では数多くの医療関連企業などが集積する我が国最大のバイオメディカルクラスターに成長しています。

また、次世代スーパーコンピュータ（京速コンピュータ「京」）が2012年の稼働をめざして整備が進められるとともに、大学などの研究機関の立地も進んでいます。

これらの強みを活かし、国の新成長戦略で重点戦略に掲げられた「ライフイノベーション」のグローバル拠点として、「アジアNo.1のバイオメディカルクラスター」をめざし、さらなる発展を遂げようとしています。



平成22年9月撮影



京速コンピュータ（京） 計算機筐体（きょうたい）
提供：理化学研究所

兵庫運河を活用したまちづくり

兵庫運河は船の難所であった和田岬を迂回するため整備着手され、1899年に完成した日本最大級の運河です。その後、貯木場として利用され、現在では産業構造の変化により商工業における利用は著しく減少しています。

この歴史的遺産である日本最大級の運河を、市民の親水空間として、また憩いの場として活用しようという機運が高まっており、1993年の「新川運河チャンネルプロムナード」の整備や、1997年の兵庫開港130周年記念イベントの開催、2005年度以降の兵庫チャンネルレガッタ大会など、様々な形で市民に親しまれています。

また、2007年6月には「兵庫運河真珠貝プロジェクト」が設立され、あこや貝の生育活動を通じた環境・情操教育の場としても活用されています。



付属資料

先人たちの歩みを引き継ぐ

神戸はこれまで、1938年(昭和13年)に発生し600名以上の尊い命を失った阪神大水害のほか、1961年(昭和36年)や1967年(昭和42年)にも大きな水害を経験してきました。そして1995年(平成7年)には未曾有の被害をもたらした、市内で4,500名以上、全体で6,400名以上もの犠牲者を出した阪神・淡路大震災に見舞われました。

わたしたちの先人は、古来より多くの災害や困難に見舞われ、その度に暮らし・経済の基盤とともに、安心してらせるやすらぎの場や心のふるさとを失ってきました。

しかしながら、そうした困難が前途に立ちだかる度に、その時々には神戸に住み、集う人々、すなわち、多様な「人財」が互いに励ましあい、協働しながら、暮らしの再生とまちの再生を図り、その後の復興と発展を果たしてきました。

記憶に新しい阪神・淡路大震災の復興過程では、国籍、性別、身体的特徴などあらゆる違いを越え、人々がともにその苦難を乗り越えるため協働し、これらの経験がその後の協働と参画、そしてこれからの「協創」へとつながっているものと言えます。

明治の終わりごろには、風光明媚な住吉村(現在の神戸市東灘区近辺)に当時の財界人たちがこぞって邸宅を構え、日本における地域コミュニティやクラブサロン活動の先駆けとなる「観音林倶楽部」を1912年(明治45年)に設立し、その後の甲南学園や甲南病院、さらには灘購買組合の創設の礎を築きました。

特に灘購買組合や神戸購買組合の設立には、当時、友愛と共同の精神のもとに貧しい人々の救済のために自律的な活動を続けた社会運動家賀川豊彦(1888～1960)も携わるなど、神戸の地に集ったこれら人財の交流と活動が、まさにその後の「人々が互いに協働し、生活を守りあう」気風や市民活動に受け継がれていったと言えます。

言い換えれば、当時のこうした神戸における先駆的な協働の取り組みは、日本における自律と相互扶助に基づいた市民活動や社会的企業の発祥であったとも言えるのです。

観音林倶楽部の設立や賀川豊彦の献身的な諸活動から100年の時を数え、また阪神・淡路大震災から15年を経た現在、わたしたちは今一度先人たちに学び、「協創」のもとにまちが飛躍的に発展していく姿を実現していくことが望まれます。

これからの神戸づくりを担うのは、わたしたち市民を中心としたあらゆる世代の多様な人財や国内外の人財にほかなりません。

2025年(平成37年)に向けて、「ひと(人)」を「たから(財)」とし、新たな豊かさをともに創造する「協創」のまちを実現していきましょう。

かんのんばやしくらぶ
観音林倶楽部
1912年(明治45年)、当時の住吉村に居を構えた財界知名の人々が、住民の交流や地域のまちづくりを考える場所として、住吉村観音林(現在のJR住吉駅北側)に設立した社交倶楽部。
日本における地域コミュニティの先駆例の一つ。



(提供:財団法人住吉学園)

- 1 新・神戸市基本構想
- 2 神戸市総合基本計画の構成
- 3 神戸市総合基本計画審議会の組織
- 4 神戸市総合基本計画審議会名簿
- 5 審議経過